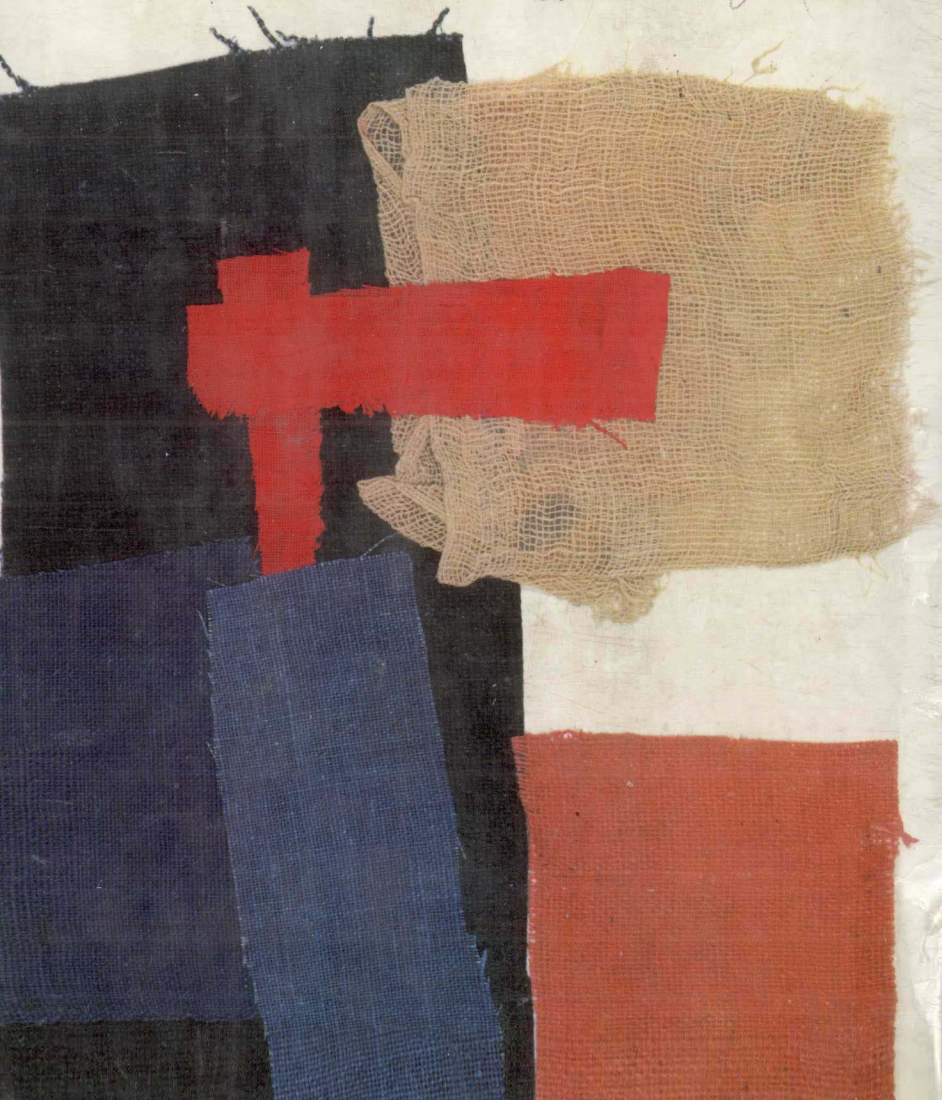


野平狩石続

船山 磬香



河出書房新社

第六卷

続石狩平野
船山敬香
小説全集

船山馨小説全集 第六卷

昭和五十一年三月十日 初版印刷
昭和五十一年三月十五日 初版発行

著 者 船山 馨

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話二九二一三七

印刷 多田印刷

製本 小高製本

©1976 KAORU FUNAYAMA

定価はカバー・帯に表示しております

目次

続石狩平野

5

解説・瀬沼茂樹

440

装
幀

佐
野
繁
次
郎

船山馨小説全集 第六卷

続
石狩平野

おなじ姿でララいてたもれ……………

「いてたもれ」を「いてつもれ」と歌った。聞き覚えだから、そう思い込んでいた。

雪虫の舞っている街のどこかで、号外屋の鈴の音が鳴っていた。

今年の夏、ヨーロッパとかいうところで戦争がはじまって、日本の兵隊も青島（チンタウ）というところへ攻めていったという。子供には遠い話であった。

雪子は七歳になっていた。近所中での餓鬼大将で、相手が男の子でも負けてはいなかった。歳上の男の子が彼女に泣かされて、親から苦情を持ち込まれることもめずらしくなかったが、雪子は喧嘩に負けても、泣いて帰ったりはしなかった。遊びも、ままごとやお手玉は嫌いで、男の子たちにまじって戦争ごっこだとか、陣取りだとか、べえ独楽などの荒っぽい遊びに時のたつのを忘れた。

いまま雪子は保険会社の空地へ遠征して、男の子たちからごっそり、パッチ（めんこ）をまきあげてきたところであった。

彼女のべえ独楽やパッチの腕前は、この界隈の悪童連のなかでも一流であったし、気の弱い子は彼女の気魄だけで参った。顔を真赤にした彼女が「それッ」とか「よいしょッ」とか、金切声で気合をかけながら、体ごと勝負にのめり込んでくるのを見ると、たいていの子がひるんだ顔色になる。そうになると、小学校三、四年くらいの子でもかなわなかった。

カチューシャ可愛いや
別れのつらさ

1

……
つんつるてんの木綿の袴（あはせ）の八ツ口に両手を押し込んで、チビた下駄の先で勢いよく地面を蹴って歩きながら、雪子は大きな声で歌っていた。

意味もろくにわからないが、この夏ごろから、たいへんな勢いで流行っている。テンポを速く、区切りをつけて歌うと、飛びはねるようにして歩く歩調と合っていたいそう調子がいい。

……
せめてまた会うそれまでは

それでいて、雪子は寡欲であった。引き揚げるときは、戦

利品のほとんどを、惜しげもなく負けた子供たちにばらまいてしまう。負けン気で意地ッ張りなわりに、遊び仲間のあいだに人気があるのは、彼女のそんなさばさばしたい一面が好かれていたせいであった。

拓殖銀行の前まで来たとき、葉の散り落ちた街路樹の陰に、身をひそめるようにして立っている女の後姿が、雪子の眼にとまった。

房のついたショールに顎を埋めているが、明子であることはひと眼でわかった。雪子は歌いやめて走り寄った。

「姉ちゃん。なにしているの、こんなところで……」

飛びつくようにして自分を見上げた雪子の視線から、明子は逃れたようにした。眼に狼狽があった。

「だめじゃないの、みっともない」

明子は自分を雪子からひき離そうとして、体をよじったが、あかぎれだらけの雪子の両手は、ショールの端を握りしめたままだった。

「なにが？」

「あんな大声で、街のなかを歌って歩くひとがありますか。」

「あんた女の子でしょ。来年から学校よ」

雪子はこつんと音がするほど握り拳で頭を叩いて、その頭で明子を押してきた。

明子はちらりとあたりに眼をやった。

「はやく家へお帰り」

「姉ちゃんは？」

「用があるの」

「用ッて？」

「いいから、お帰り。子供にはわからないことなんだから……」

ちょうど、銀行の石段を降りてくる笠間の姿が眼について、困りはてたように語尾が消えた。その明子の視線を追って、雪子は唇をへの字に結ぶと、近寄ってくる笠間をにらんだ。

「ね、先に帰んなさい。私はね、笠間さんと御用があるんだから」

「雪子、あいつ嫌いだ」

眼を剝いたまま、ひどくはつきりした声で雪子が言った。笠間はすぐそばまで来ていた。もちろん聞えたにちがいないかった。

「雪ちゃんも来ていたのか」

笠間は意外な顔をした。

「ちがわい、来てたんでなんかないや！」

雪子は飛び退くように二人から離れると小走りになった。そうして、小半町ほど先で振り返ると、両手でメガフォンをつくり、腰を折って、体じゅうからしぼり出すような声で叫んだ。

「笠間のばかやろ！。芋喰って、粟喰って、屁たれて、死ぬじまえ！」

明子とならんで歩きだしていた笠間は、声のほうへ無表情な眼をやったが、すぐ視線を戻して、眼鏡の鉄縁を細長い指

で押えた。

「なんて子なんでしょう、ほんとに……」

明子は顔があげられなかった。

雪子はいまは一目散に駆けだしていた。走りながら、カチユーシヤ可愛いや別れのつらさ……と呟鳴っていた。

「子供ってのは敏感なんだ」

笠間が呟いた。独り言めいていた。

「偽善者や卑怯者は本能的に嗅ぎわかるのさ」

「それ、私のこと？」

「もちろん、僕のことだよ」

「私、自分でそんなふうにいる人厭なの」

「仕方がないさ、事実なんだから……。実は、この前の土曜日に小樽へ行ったんだ。君とのことを親父に話すつもりでね」

「なぜそんなことを……。私のことは気にしないでいいって言ったでしょう」

「そう言ったって、僕も責任があるからね。だが、けっきょく言い出せなかった」

声に自嘲があった。

「私は隆治さんに責任を感じてもらおうなんて、はじめから思ってもいません。もっともって愛されたいとは、いつも思っていたけれど……」

「君への気持に嘘はないよ。これからもうさだ」

明子は眼をあげて男を見た。

彼の愛情に嘘があると思ったことはなかった。しかし、も

っとなにもかも灼きつくようなはげしさがほしかったのも事実であった。いつも、どこかに満たされぬもどかしさがあった。それは二人の性格の違いからきているのかもしれない。

笠間は、一昨年農大を出て、いまの銀行に勤めるようになったのだが、明子との関係もそのころからであった。

明子には無惨な過去がある。雪子はその十字架であった。だから彼女は臆病であった。人を愛することを怖れた。それだけに、いったん堰を切ってしまうと、それは彼女のすべてを呑みつくした。結婚するつもりははじめからなかったし、できるとも思っていなかった。そんな資格はないと諦めていた。笠間は彼にふさわしい無垢な相手と結婚すべきである。自分はその束の間燃えつきればいいのだ。明子は最初からそう考えていた。

二人は五番館裏の「花むら」という割烹旅館へ入った。会えばいつも、どちらが誘うともなく、そういうことになった。酒の飲めない笠間は、部屋に入るとすぐ、飢えたように彼女を求めたし、明子もそれに応え、応えているうちに彼以上に燃えた。それも、いつものことであった。

六尺ちかい笠間の体は、胸が薄く、長い手足が蜘蛛のように細かった。はげしい動作をすると喘いで、ときには軽く咳込むこともあった。そんなとき、明子は男がいじらしく、いとおしくてたまらなかった。肩胛骨のつき出た笠間の背中を抱きしめながら、その板のような胸に顔を埋めっていると、わけもなく涙がにじんできて、低い嗚咽をもらしたりもした。

「結婚しても、君を離したくない……」

腹這いになって、枕もとの煙草に火をつけてからも、しばらくの間息苦しそうに、枕に顎を埋めていた笠間がぼそりと言った。

「お式はいつ？」

「来月の末だ……。親父は今度の戦争で輸出が伸びるとみて、製粉所の拡張を急いでいるんだ。取引銀行の貸付部長の娘を嫁にできれば、こんな都合のいいことはないだろうさ。だが、僕らが別れることもないだろう。正式な結婚はできなかつたって……」

「だめ。なにも知らないで奥さんになる人に、つらい思いをさせたくないの」

「君はそれでいいかもしれないが、子供はどうなるんだ。

君、そう言つたら、子供ができたって」

「いいの。私が育てる」

「君が育てるにしても、僕の認知が必要だよ。このまま切れずにいれば、いつか折をみて親父にも打ち明けて、認知できる機会もあるだろうが……」

「あなたはなにも心配しなくていいのよ。迷惑はかけないわ」

「だが、それじゃ私生児だ。雪ちゃんの二の舞じゃないか」

それを言つた笠間の口調は低く翳っており、眼窩のくぼんだ肉の薄い横顔にも、べつに皮肉な表情が覗いていたわけではなかった。が、明子は頬が硬張つた。眼が男の貌を吸つた

まま、動きをとめてしまつていた。

「知つていたよ」

彼は枕に顎をのせて横顔を見せたままで言つた。

「君や小母さんたちは隠しおおせているつもりでも、ああいうことは不思議に知れるものなんだ」

「隆治さんいつからそれを……」

いたたまれない思いで、明子は声が慄えた。

「君の家にいたときからさ。ほかの下宿人も、みんな知つていたようだった。白状すると、最初、僕は君なら真面目に考えなくてもいい、無責任につきあえると思つたんだ。もちろん、そんな卑劣な気持が、ながくつづいていたわけじゃないが……」

笠間は煙草の烟りにむせた。

明子は夜着の襟を額のうえまで押しあげ、それでも足りずに、かたく^{まぶた}瞼を閉じた。

「僕は君の過去を忘れようとつとめた。君は被害者で、責任はないんだから、それが当然だ。だが、君への気持が真剣なものになればなるほど、それが僕にとつても、取り返しのない致命的なものになつてくるような気がして、君を愛しているのか憎んでいるのか、わからなくなつてしまふんだ。たぶん、僕はひどく狭量な男なのだろう。理性では君の罪ではないと承知していながら、感情が君を許せないのだからね」

「あなたが許せないのは、雪子を妹のように装つた私の、ごまかしの生き方じゃないんですね。あなたへの嘘が許せないのとはちがうのね」

夜着で顔を覆ったまま、明子は抑揚の消えた声で訊いた。

笠間が体を起す気配が夜着に伝わった。そのまま彼は布団のうえに胡坐をかいて、吸殻を丹念に灰皿にすりつけている様子であった。

「そこが僕のなさけないところさ。君が正直に打ち明けてくれたとしても、たぶんおなじことなんだ。ことによると、もっとひどい気持になっていたかもしれないね」

明子は夜着をかぶったまま、掌で眼を拭いた。そして、ほとんど機械のいい明るい声で

「わかったわ」

と言った。

心は虚脱していた。が、男の苦い思いも理解できた。

明子は寢床のなかで手ばやく伊達巻を締め直すと、布団からすべり出て、乱れ箱の着物に袖を通した。笠間の視線が熱っぽく光って、その背中に喰い込んでくるのがわかった。

「結婚はしても、僕は君と別れたくない。別れる理由もないじゃないか」

「どうして？」

明子の声はやさしく聞えた。

「私は情婦かお妾が分相応な女だから？」

笠間は束の間、返す言葉を失った。

「ひどいな、君は……」

「あなたを責めているんじゃないんです」

「僕が卑怯で身勝手なことはわかってる。だけど、君を離したくないのは、真底君が好きだからなんだ」

笠間は胡坐の膝に視線を落してしよげた声になった。それがすこし作意的に見えた。

明子は羽織の紐を結び、ショールを取って振り返った。

「握手してください」

眼に笑みをたたえながら、明子は子供のような仕草で、真直ぐ手をさしのべた。笠間がその手を握って、引き寄せようとしたが、彼女はそうさせなかった。優しくはあったが、妥協のない拒みかたであった。

「まさか、これきりになるつもりじゃないだろうね」

「この日のくるのは、はじめからわかっていたんですもの。さりげなくお別れしましょうね。もう、お目にかかりません」

障子際で明子にはっこりした。

「待てよ、待ててくれ……」

笠間がなにか取り乱した声で言いながら立ちあがったが、そのときはもう、彼女は身をひるがえて廊下へすべり出ていた。追って出るには、笠間の姿はぶざまに寝乱れていた。

街は夜になっていたが、明子は廂髪びんの襟足や鬢びんのみだれが気になって、頭からショールをかぶって急ぎ足になりながら、はじめて顔が歪んできた。うるんだ眼のなかで、街なみの灯りが碎けて硝子粒をまいたように揺れて見えた。

自分には暗い負い目がある。笠間がほかの女と結婚するのは当然だし、そのときは潔く別れなければならないことも、最初から覚悟のうえであった。いまだ悔いはいはずなの

だ。それなのに、体のなが空っぽになったような怪しきであった。

学生のころの笠間は、仲間の石畑などと、よく浮浪者のような恰好をして、細民街へ出入りしていたものである。トルストイズムとか、不幸な者のなかへ、とかいうのも口癖であった。それは明子から見ても軽薄であった。

彼は豊かな大学生で、いわば特等席の人間である。その居心地のいい安全地帯から踏み出す気持もないのに、時たま気の向いたときに下界に降りていって、彼のいう不幸な人間を眺めては、すぐ自分の席へ戻ってくる。彼は自分のものにはなにとつ賭けてもいないのに、あたかも賭けているような自己陶醉にひたっているにすぎなかった。

笠間の意識にも、そういう自分の軽薄さは映っている。だから、臆病とか卑劣とかいう言葉で卑下してみせるのも、そのころから彼の口癖のようであった。自分から卑下してみせることによって、相手の非難をはぐらかそうとする狡さが、彼にはあった。

明子への対し方も、それに似たところがあるのを、彼女は知っていた。たとえ、彼女に過去がなくても、下宿屋の娘風情と、彼が本気で結婚を考えたかどうか疑わしい。

過去のある女だから、真面目に考える必要はないと思って接近したというのは、彼の本音にちがいないし、それは現在も彼の態度のどこかに尾を引いていた。ほかの女と結婚してからも、秘密の関係をつづけることを要求し、口では卑劣だとか意気地なしだとか、自分を卑下してみせながら、実際は

ほとんど無反省でいられるのも、彼が明子を自分の妻になる女と、対等の人間として考えていないことを、立証しているようなものであった。

だが、明子は笠間を怨む気持にはなれなかった。男は誰でも、恋人や、まして妻には一点の汚点も許したがいらないものだ。往きずりの男に、土足で踏み躪られた女を扱うにしては、彼はまだしも温かく、優しくあったのだ。

明子は『青鞥』をよく読む。平塚雷鳥や田村俊子、茅野雅子、野上八重子らが執筆していた女流文芸雑誌だが、女性の自我の確立とその解放を旗印にかけていた。

元始、女性は大に太陽であった。真正の人であった。今、女性は大に月である。他によって生き、他の光によって輝く、病人のような蒼白い月である。私共は隠されて仕舞った我が太陽を、今や取り戻さねばならぬ。

雷鳥は『青鞥』の創刊号にそう書いた。文芸雑誌の創刊の辭というより、婦人解放運動の宣言書であった。

今年の一月、雷鳥は女性に犠牲と忍従を強いるだけの封建的な家族制度下の結婚を、身をもって否定してみせる意図もあって、公然と歳下の青年画家と同棲して「自由結婚」と称した。世間の非難と嘲罵は、雷鳥と青鞥一派のいわゆる「新しい女」たちに押寄せ、いまも彼女たちは日本中から袋叩きの目にあっていた。雷鳥が歳下の画家を呼んだ「若い燕」という言葉は、軽蔑と揶揄をこめた流行語になっていた。芝居

では松井須磨子の演ずる『人形の家』のノラや『故郷』のマグダが熱狂的な人気を集めてはいても、それは舞台の上の架空の物語だからであつた。自分たちの周囲に、ノラやマグダが実際に生きることなどは、日本の社会ではまだ許されることではなかつた。

明子は青鞥派の主張や生き方に共鳴するものがあつた。心のなかで雷鳥たちの勇氣に拍手を送つてもいた。だが、やはり明子にもそれは遠い世界のことではなかつた。現実に分の問題となると、彼女も他の光によつてしか輝くすべを知らない「蒼白い月」にすぎなかつた。

「明子じゃないか」

赤煉瓦の五番館の横を停車場通りへ出たところで、聞き馴れた声が明子を呼んだ。振り返ると、すぐ背後に壮太の姿があつた。

「お前、いま帰りかい」

いっになく弾みのある声で彼は聞いた。

明子は算盤の腕を買われて、区役所の会計課に勤めてゐる。むかし、鶴代が奉公してゐた安部卯之助が区長になつてゐて、その厚意で得た職場であつた。

「今日は日曜よ」

うしろめたい思ひで、明子は彼を正視できなかつた。

「お父さん、今度はどっちのほうへ行つてたの」

「釧路のほうをな」

壮太は先に立つて歩きながら、力のこもつた言い方をした。何年にもないことであつた。

裾の長い無尻むしりのうえから兵隊用の革バンドを締め、脚絆かばんに革鞋かぢはきで、肩から大きなブリキの胴乱を提げた壮太の恰好は、夜目にも異様な感じであつた。垢じみた鳥打帽子の下したの、小髻こびのあたりには白いものが目立っていた。

「今度はな、めずらしい獲物があつたんだぞ。どうもキタサンシヨウウオやないかと思うんだ」

壮太は腰の胴乱を、片手でそつと抑えるように撫でながら、若者のようにきらきらと輝く眼の色になつていた。

「そう……」

「平戸前というところで見つけたんだがね。トカゲぐらいの大きさを三匹、採集してきた。もしキタサンシヨウウオだつたらすごいことだぞ」

「そう。どうして……」

「お前は知るまいが、北海道に棲んでゐるのはエゾサンシヨウウオという種類でな。キタサンシヨウウオの分布はいまのところ満洲とシベリアと樺太、それに北千島に限られていて、北海道には棲んでゐないことになつてゐるんだよ。だから、もしこれがキタサンシヨウウオだつたら、たいした新発見なんだよ。な、すごいじゃないか」

「そうね……」

明子は父の興奮にかたちだけでも調子をあわせなかつたが、沈んだ氣のない応え方しかできなかった。

明子はもちろん、山椒魚などになんの興味もなかつた。それどころか、あの醜怪な姿には嫌惡の情を催さずにはいられなかつた。なぜ壮太が、よりよつて山椒魚などに夢中にな

るのかわからなかった。その点では、彼を氣違ひ扱いして笑いのものにしてゐる世間の人たちを、非難する氣持にもなれなかった。けれども、彼女には壮太の一途さが心にしみてゐた。その一途さのゆえに、彼が笑えなかった。

山椒魚は壮太にとって、山椒魚を超えたなにかになつてゐる。それは両棲類の一種などではなくて、彼の人生をかううじて内側から支えている情熱であり、かけがえのない尊貴な「あるもの」にちがひなかった。ほかの人間には、いかに無意味であつても、それがある一人にとって無上の意味をもち得ることは、この世にはいくらもある。おぼろげながら、明子にはそれが理解できた。

だが、いまの明子は正直なところ、それどころではなかった。二度と逢わない覺悟で笠間と別れてきたばかりである。心に余裕がなかった。

壮太も彼女の様子に氣づいたようであつた。彼は歩調をゆるめて、明子の顔を覗き込むようにした。

「どうした。顔色がわるいな。体具合でもわるいんじゃないか」

「いいえ」

「ならいいが……。なんだか元氣がないな」

「すこし寒氣がするの。風邪かもしれないわ」

と、明子はショールから顔をあげて微笑んでみせた。

「氣をつけなけりゃだめだよ。お母さんたちも変りないね」

「ええ、みんな元氣よ」

壮太は頷いて、たれ落ちそうになつた水漬をすすりあげた。

鶴代や子供たちの顔を見るのは半月ぶりである。うれしくないことはなかったが、家が近づくにつれて、さすがに壮太の足は重くなつた。

壮太が働かなくなつてから、もうかなりの歳月がたつてしまつてゐる。明子も勤めてはいるが、一家の暮しは、ほとんど鶴代ひとりの肩にのしかかつてゐた。鶴代は何人分も働いてゐた。まるで馬車馬のようであつた。それでいて愚痴ひとつこぼさなかつた。が、暮しは樂ではなかつた。

下宿料のわりに賄いがいいことは、下宿人のあいだでも定評があつたが、鶴代は物価があがつても、下宿料を値上げすることも、賄いの質を落すこともできなかった。払いを溜める下宿人があつても、ろくに催促もできず、それどころか、彼女のほうから相手に氣を遣つた。うっかりしてゐるうちに、何ヵ月も下宿料を溜めたあげくに、行方をくらます者などもあつた。

そのうえに、壮太郎が中学へ通つてゐた。いまの杉の家の状態では分不相応だと、壮太は反対であつたが、鶴代の熱心に押し切られたかたちであつた。

鶴代にすれば、壮太の実子でもない明子が女学校を出てゐることを思えば、たとえ、窮迫した暮しにはなつていても、壮太郎を小学校だけでやめさせたのでは、夫にも、息子にも道が立たなかつた。だが、それ以上に、これからの人間には、なによりも教育が大切だと思つてゐた。できたら農学校まで入れてやりたい。口には出さなかつたが、それが鶴代のひそかな夢であつた。